

令和7年度 日本大学櫻丘高等学校 自己評価票

【本校の目指す学校像】

日本大学の教育理念である「自主創造」の精神を基に、「自ら学び」「自ら考え」「自ら道をひらく」能力を持つ生徒の育成を目標とする。そのためには「生徒ファースト」の視点に立ち、個々の教員が一人一人の生徒と向き合いながら、様々な情報を共有し、全教職員が協力して生徒指導に当たる必要がある。これにより個々の生徒が学習活動や課外活動に生き生きと取り組み、基礎的な知識・技能ばかりではなく、思考力・判断力・表現力、あらゆることに主体的・協働的に取り組むことのできる力を備えた生徒を育成していく。本校は70有余年の歴史を持つが、先人たちが培ってきた良き伝統の上に、現代社会におけるニーズに応える新しい教育を取り込む「不易流行」の精神を持って、魅力のある、選ばれる学校を目指していく。

【本校の特徴】

本校では、総合進学（G）クラス、特別進学（S）クラスの2コースを設定し、日本大学を中心に個々の生徒の志望に対応した教育の充実と進学指導體制の確立を目指しており、それぞれのコースに応じたきめ細やかなホームルーム指導や生徒指導で自主性を育み、社会性も育成していることが特徴である。

令和元年度より現代の社会の変化に対して身につけるべき学力の3要素、すなわち「基礎的な知識・技能」を活用するための「思考力・判断力・表現力」、そして「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を養うために「櫻イノベーション」を立ち上げ、より一層充実した教育活動を展開している。その具体的な施策は、①グローバル教育×ダイバーシティ、②体験型高大連携教育×サイエンス・リテラシー、③アクティブ・ラーニング×DX、④クリティカル・シンキング×プレゼンテーション・リテラシー、⑤ルーブリック評価×PDCAの5つの柱から成っている。①～④の様々な教育施策を実施した成果を、⑤「SAKURALルーブリック」によって学期ごとに生徒自身で評価させ、21のテーマごとの伸長の度合いを可視化し、次の「SAKURALルーブリック」に目標を定めさせることで、PDCAサイクルを回しながら学力の3要素の確立を図っていく。

【令和7年度の重点目標】

1 「グローバル教育×ダイバーシティ」

留学制度を更に充実させ、ニュージーランドでの1年間の単位認定留学や3か月の中期留学、イギリスでの2週間の短期語学研修を進めるとともに、令和6年度より実施した海外修学旅行（シンガポール・マレーシア）の内容等を見直し、グローバル教育を全生徒へ展開する。通常の授業においては、ネイティブ教員による英会話授業（クラス3分割体制）や放課後英会話カフェの実施により、英語4技能の修得を進める。新学習指導要領の目玉である「探究的な学習」では、1年次全クラスが英字新聞の作成を行う。

2 「体験型高大連携教育×サイエンス・リテラシー」

日本大学のスケールメリットを最大限に生かすとともに、文理学部に隣接する併設校であるメリット活用して、キャンパスツアー、単位認定講座の受講、研究室訪問等単なる進学指導にとどまらない進路観育成を中心に取り組むことにより、優秀な生徒を日本大学に進学させる。今後は探究学習の中心的な役割として高大連携教育が重要となる。日本大学付属校のメリットを最大限に活用し、16学部と積極的に連携し、優秀かつ意欲的な生徒を日本大学へ進学させるよう取り組む。

3 「ルーブリック評価×PDCA」

スクール・ポリシーを達成するため、5つの価値観と4つのスキルに関し21のテーマを設けて達成度を5段階で可視化したルーブリック評価を入学時と各学年で年間に3回実施する。どのような生徒を育成したいのか、生徒は何ができるようになるのかということを明確にし、目的意識を持って学校生活に取り組むことができるように進めていく。

〔令和7年度の自己点検・評価結果〕

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和8年度取組方策 (Action)
教育活動	<p>特色・魅力のある教育への取組</p>	<p>令和4年度に施行された新学習指導要領での学びは、令和7年度より全学年で実施している。各教科の入念な準備やこれまでの3年間の検証の下で、「生きる力」を育むきめ細やかな内容のシラバスを作成した。</p> <p>また、シラバスに基づき、各教科でアクティブ・ラーニングを取り入れた充実した授業を展開している。</p> <p>探究学習では、学年ごとのシラバスに沿って、主体的な学びやアクティブ・ラーニングを実践している。3年次では探究学習の集大成として、3学期に自分たちの学習内容についてプレゼンテーションを行っている。どのクラスもしっかりと取り組んでおり、主体的で協働的な学びが浸透している。</p> <p>観点別評価では、3観点(知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度)の割合や評価方法等について、全教科統一の方法で実施し、生徒・保護者に学期ごとの評価を周知している。これにより、点数だけではなく多角的な学習評価がなされるのと併せて、生徒も自身の学習姿勢を確認することができ、学びの改善にも役立っている。</p>	A	<p>各教科のシラバスを検証し、生きる力を育むカリキュラム編成についてブラッシュアップしていく。</p> <p>探究学習についても、内容・時間配分などを検証してより良いものにしていく。</p> <p>観点別評価については、生徒の学びへの姿勢が適切に評価できるように、各教科での打合せ等をしっかり行っていく。</p>
	<p>生徒による授業評価アンケート結果に基づく授業改善</p>	<p>教員は、生徒による授業評価アンケートの結果受取りと同時に振り返りをまとめており、速やかに授業改善に反映できるようになっている。また、通年で教員相互の授業見学を認めており、常に授業改善が可能な環境づくりも進めている。</p>	A	<p>授業での指導方法等について、教員が自ら振り返り改善できる機会として、令和8年度以降も生徒による授業評価アンケートを活用していく。</p>
	<p>高大連携教育の取組</p>	<p>高大接続改革について、学力の3要素を踏まえて本校では以下の取組を実施している。</p> <p>スクール・ポリシーを明確にし、新学習指導要領に基づいたシラバスを作成して主体的で協働的な学びを進めている。</p> <p>大学入試については、多様化する入試方法に対応できるよう、業者とも連携しながら</p>	A	<p>左記の取組について、多面的・総合的に評価し、「学力の3要素(1.知識・技能、2.思考力・判断力・表現力、3.主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度)」を育成する教育活動を行っていく。</p>

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和8年度取組方策 (Action)
		<p>ら講習や英語検定試験受験等の講座を推進している。さらに、大学付属校の特徴を生かして、法学部・文理学部・経済学部・商学部で高大連携教育の実施、学部訪問、日本大学の教員による出張講義や文理学部に設立された「次世代社会研究センター (RING S)」での探究活動への参加など、様々な学びに触れる機会を提供している。本校独自の取組として、定期考査前に放課後学習チューター制度を実施している。これは文理学部の教員志望の学生による定期考査前の質問対応であるが、生徒は身近な学生に勉強をサポートしてもらうため、大学の学生や施設に親しみを持つことができている。これらの取組により、多くの生徒が日本大学に進学した。あわせて、他大学についても一般選抜だけでなく、多様な選抜方法を利用して進学実績が上がっている。</p>		
	<p>スクール・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針及び入学者の受け入れに関する方針）の策定及び公表</p>	<p>本校のスクール・ポリシーは、「スクール・ミッション」「グラデュエーション・ポリシー」「カリキュラム・ポリシー」「アドミッション・ポリシー」の4つで構成し、本校ホームページで公表している。 URL : https://www.sakura.chs.nihon-u.ac.jp/</p>	A	<p>スクール・ポリシーについて、学校長をはじめ学校の方針をしっかりと検討し、全教職員で共有していきたい。 また、本校の魅力を伝えられるように、適切に公表していきたい。</p>
	<p>グローバル教育の更なる推進</p>	<p>令和7年度は、1・2年生対象のイギリス語学研修71名、ニュージーランド中期留学9名の生徒が参加した。これらの参加人数は毎年安定している。令和6年度に引き続き、「U. S. デュアル・ディプロマ・プログラム」も好調で、現在2～3学年で6名の参加者があり、アメリカの大学への進学を目指している。 第2学年の修学旅行はシンガポール・マレーシアを訪れ、異文化に触れる機会を提供した。</p>	A	<p>本校の櫻イノベーション（教育の特長）の柱となっている「グローバル教育×ダイバーシティ」に基づき、令和8年度も語学教育に力を注いでいく。 留学や修学旅行のみならず、どの教科においても日々の学習にグローバルな視点を取り入れ、多様性を受け入れる人材を育てていきたい。</p>
	<p>教育の質の向上及び働き方改革に向けた行事予定の見直し</p>	<p>教職員研修を年3回実施し、様々なテーマについて学んだ。教員の業務の多様化、修学旅行の日程等を踏まえ、各行事の実施時期に偏りがないように検討した。</p>	A	<p>令和7年度の教職員研修は、内部統制、インクルーシブ教育、発達障がい及びハラスメント等のテーマで研修した。令和8年度も引き続き様々なテーマで研修する。 働き改革を踏まえての行事予定の見直しについても、教員からの意見を取り入れながら協議していきたい。</p>

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和8年度の取組方策 (Action)
学校生活への配慮	いじめ防止のための取組・いじめ事案への適切な対応	「学校生活アンケート」による生徒の理解・掌握を進め、ささいなサインを見逃さないこと、相談しやすい環境作りを実践した。 日本大学作成のリーフレット「日本大学は、「いじめ」を絶対に許しません！」を配布し、いじめの概念やいじめは絶対に許されないことであるという点を全校生徒、保護者及び教職員に周知した。	B	日本大学作成のリーフレット「日本大学は、「いじめ」を絶対に許しません！」を配布し、いじめの概念やいじめは絶対に許されないことを全校生徒、保護者及び教職員に周知し、生徒のささいな変化に気付くこと、気軽に相談できる体制を取ることに重きを置く。 担任や授業担当者、部顧問等が生徒の相談に乗り、また保健室やカウンセラー、スクール・ロイヤー等の専門家との連携を強化する。
	危機管理マニュアルに基づく安全管理及び危機管理のための取組	校内のパトロールを強化するとともに、盗難防止策として教室や部室、個人のロッカー等の施錠指導を徹底した。 自習室はある意味でプライベートな空間であることから、新たに防犯カメラを設置し、環境の整備に努めた。	B	防犯カメラは不法行為の抑止にもつながり、安全確保の観点からも増設すべきであると考えた。同時に教員によるパトロールと規範意識の醸成にも力を入れ、安心して学校生活を送ることができるよう体制を整えていく。
課外活動	文化祭での不測の事態への対応の強化	雨天時の教室割当ての事前作成や入場口でのリストバンドの配布を徹底することで、防犯面でも効果があった。	A	外部の方が多く来校され、今後より一層の防犯面の強化が必要となるので、他校でも導入しているように完全チケット制にするなどの対策を考えていく。
	ボランティア委員の活動の充実	校内に文房具回収箱や使い捨てコンタクトの空ケース回収箱を設置した。	A	施設に足を運んだり、災害支援など、実際に足を使ってできたりする活動を充実させていく。
進路指導	日本大学進学に向けての取組	7月の面談時に12学部より担当者を招いて進学相談会を開催した。相談件数は251件に上った。 4月、7月、9月に3年生を対象に進路説明会を実施し、日本大学の学校推薦型選抜(附属高等学校等)について説明を行った。また、進路説明会の動画を本校ホームページにもアップし、保護者にも視聴を促した。 1年生に対して、4月に文理学部のキャンパスツアーを、7月に首都圏学部への学部訪問を実施し、日本大学への進学意欲を高めることができた。	A	相談件数を更に伸ばせるよう、事前のアナウンスを丁寧に行う。 講演内容を見直し、より生徒が主体的に考えられるようにする。 実施後の生徒アンケート等を可能な限り学部にフィードバックし、学部との連携を図る。
	キャリア教育の充実	1年生は10月に、2年生は7月に、日本大学の各学部より延べ37名の教員を招き出張講義を実施した。事後アンケートによると、「満足」「やや満足」と回答した生徒は80%に上り、学問研究の一助となった。 2年次11月の進路説明会では、卒業生による進路講演を実施した。	A	当日の教室担当の教員への説明をより丁寧に行い、スムーズに運営できるようにする。 進路講演に協力してくれる優秀な卒業生を早い時期に確保できるようにする。
	高大連携教育	科目等履修生として、下記の学部の授業を受講した(前後期含む)。 法学部 6名 文理学部 27名	B	参加者数を増やせるよう、生徒、保護者への周知を丁寧に行う。 早めに募集できるように、「次世代社会研究センター(RINGS)」に働き掛ける。

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和8年度の取組方策 (Action)
		<p>経済学部 7名 商学部 5名 生物資源科学部 21名 文理学部に設置している「次世代社会研究センター (RINGS)」との合同イベントとして、産官学連携による探究プログラムに1名の生徒が参加した。</p> <p>6月に実施した文理学部体験授業では、223名の生徒が参加した。また、同日開催された保護者対象学部説明会には300名の保護者が参加した。</p>		
保健衛生	健康診断の実施及び感染症の予防	<p>4月に健康診断を実施した。</p> <p>4月に新型コロナウイルス感染症・インフルエンザ予防対策について、令和6年度からの対策を確認し、更に10月にその他の感染症への対策も周知徹底を図った。</p> <p>6月に熱中症予防対策を呼び掛けた。</p>	A	<p>令和8年度は4月21日(火)健康診断日が決定しており、2月に業者との打合せを開始する。令和8年度の始業式に健康調査票の回収を行う。</p> <p>熱中症予防の注意喚起は5月以降に、感染症予防の注意喚起と手続についての確認は1学期と2学期にそれぞれ行う。</p> <p>新型コロナウイルス感染症・インフルエンザについては、令和8年4月より出席停止届と合わせて証明書も提出するように変更する方向である。</p>
	特別支援体制の強化	<p>特別支援に関して、守秘義務に留意しつつ生徒の情報共有と個別対応を周知徹底した。</p> <p>1年生対象の生徒相談資料調査を行い、体と心の悩みを早期に見いだし、面談等に活用した。</p>	A	<p>各学年よりヒアリングとミーティングを通じて、支援や配慮の必要な生徒についての情報を得る。</p> <p>7・12・3月：ミーティングの開催 5月：生徒相談資料調査の実施 通年：合理的配慮についての教職員における共通理解の促進</p>
図書	図書室の利便性向上と利用促進	<p>図書館利用に関する情報をClassiにて適時配信した。なお、配信時の添付ファイルは画像のサムネイルを表示し訴求力を高めた。</p> <p>図書委員推薦図書のPOPの充実や写真部生徒作品の展示、オリジナルブックカバー配布など生徒に関心を集める図書室を目指した企画を実施した。</p>	A	<p>インターネットの普及のみならずAIの実用性の向上により、時事的な情報収集は図書にはよらないスタイルが主流であることは否めない。しかし、著作物による事実確認が不可欠な領域や学習・研究は存在し続けることから、それらの期待に応えられる環境を維持していく。また、情報収集の場としてだけでなく、文化や娯楽、気分転換の場としての図書室の在り方を探っていきたい。</p>
	蔵書の精選	<p>司書による選書を中心に、図書委員生徒による選書を行い、陳腐化した資料の整理も適宜行った。また、受験生向けの図書(赤本・参考書)を充実させることにより、一般受験に向かう生徒のニーズにも配慮した。</p>	B	<p>ニーズが明確な学習参考書の充実を図る一方、グローバル教育やサイエンス・リテラシーに資する図書・資料の収集を継続する。また、学術的な図書・資料の利用については文理学部図書館が利用できるメリットを生かし、高校図書室ではサブカルチャー的な図書・資料の収集についても柔軟に対応する。</p>
広報	学校案内のリニューアル	<p>学校案内のリニューアルについては、令和6年度より検討を開始し、計画的に準備を進めてきた。今回の改訂では、横型から縦型へ変更し、クリアファイルへの収納のしやすさなど、実際の配布・活用場面を踏まえた使い勝手の向上を図った。完成した学校</p>	A	<p>学校案内は本校のブランディングの基盤となる広報ツールの一つである。今回リニューアルしたデザインは、単年度で完結する制作ではなく、3年間のスパンを見据えたデザイン設計としているため、令和8年度も中長期的なブランディングの基盤づくりを意識した制作を進めていく。</p>

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和8年度の取組方策 (Action)
		案内は予定どおり7月に納品・運用を開始し、相談会や説明会等での配布部数も例年以上となった。結果として、夏季休業以降の本格的な広報活動の立ち上がりに寄与することができたと考えられる。		
	動画コンテンツの定期的な配信	令和7年度は広報活動の強化を目的として、動画コンテンツの定期的な配信に取り組んだ。学校行事に関する動画、生徒インタビュー動画、卒業生インタビュー動画及び入試概要説明動画など、多様なテーマを設定し、おおむね2か月に1度のペースで継続的に配信することができた。各動画の視聴状況も良好で、全ての動画が1,000回以上の視聴回数を記録し、多いものでは8,000回を超えるなど、一定の訴求効果が確認できた。また、制服紹介動画については学校案内のリニューアルと連動させ、紙媒体と動画媒体を組み合わせた情報発信を行った。これにより、ビジュアル面での統一感を持たせながら、本校の魅力を多角的に伝える広報展開につなげることができたと考えられる。	B	令和8年度は、生徒の普段の生活にスポットを当てたインタビュー動画や卒業生の活躍にスポットを当てた動画などの作成を検討している。令和7年度に引き続き、おおむね2か月に1度程度の継続的な配信を目指していきたい。
管理運営	海外修学旅行の推進	令和6年度に引き続き修学旅行を海外(シンガポール・マレーシア)で実施した。学年の入念な打合せ・準備もあり大きなトラブルもなく終了することができた。生徒にとって満足度も高いものとなった。	A	実施内容や班編成については、再考の余地があるため、令和7年度の実施状況を踏まえて内容の精査、適正な金額等の意見等を参考にして決定していく。
	不審者対応の見直し	正門警備の強化は、令和6年度より継続的に検討し、不審者対応の徹底を図った。全教職員の職員証の提示、正門以外のゲートの開閉時間の制限、下校後の生徒の再入校の制限を実行した。	B	朝のグラウンドからの移動時や体育の時間、部活動の時間帯の移動時の対応を再検討する。また、学校行事等における来校者の対応をイベントごとに検討する。
	施設・設備の老朽化対策	安全衛生委員会の委員によって校内施設の巡視を行い、毎月開催される安全衛生委員会で施設の破損や瑕疵の状況を報告し、その改善を図った。	A	状況によっては改善に長期間かかるものや改めて予算化する必要があるものがあり、全てを逐一改善することは難しいが、「危機管理マニュアル」に従って生徒の安全を第一に対応していく。

〔令和7年度の自己点検・評価結果概要〕

令和7年度は、令和6年度に続き海外修学旅行（シンガポール・マレーシア）を12月に実施できた。その結果、授業、課外活動、学校行事、高大連携イベントも全て通常どおり全うすることができた1年であった。

3年生の進学状況については、日本大学への進学者数は学校推薦型選抜（付属高等学校等）基礎学力選抜方式、付属特別選抜方式を合わせて301名（3学年全体の64.0%）となっており、昨年度は344名（同69.4%）であった。基礎学力選抜方式での進学者数は225名である。なお、他大学の学校推薦型選抜の状況は、12月の段階で71名（同15.1%）、その多くは指定校制であった。今後、Sクラスを中心とした一般選抜の結果により難関私大等他大学への進学者数は増える見込みである。

櫻イノベーションの進捗状況については、①グローバル教育×ダイバーシティにおいて、イギリス短期語学研修、ニュージーランド留学（単位認定・中期）を実施し、国際交流を推進できた。また、②体験型高大連携教育×サイエンス・リテラシーにおいて、日本大学各学部から教員を招いての出張講義に加えて、学部訪問を実施し、生徒の進路観育成に役立たせることができた。さらに、③ルーブリック評価×PDCAにおいては、ルーブリック評価を学期ごとの3回に増やして、生徒の教育活動への振り返りや目標設定をより明確化するとともに、「学力の3要素」の達成状況を可視化できるよう工夫することができた。

〔令和8年度の重点目標〕

1 「グローバル教育×ダイバーシティ」

留学制度を更に充実させ、ニュージーランドでの1年間の単位認定留学や3か月の中期留学、イギリスでの2週間の短期語学研修を進めるとともに、令和6年度より実施した海外修学旅行（シンガポール・マレーシア）の内容等を見直し、グローバル教育を全生徒へ展開する。通常の授業においては、ネイティブ教員による英会話授業（クラス3分割体制）や放課後英会話カフェの実施により、英語4技能の修得を進める。

2 「体験型高大連携教育×サイエンス・リテラシー」

日本大学のスケールメリットを最大限に生かすとともに、文理学部に隣接する併設校であるメリット活用して、キャンパスツアー、単位認定講座の受講及び研究室訪問等単なる進学指導にとどまらない進路観育成を中心に取り組むことにより、優秀な生徒を日本大学に進学させる。今後は探究学習の中心的な役割として高大連携教育が重要となる。日本大学付属校のメリットを最大限に活用し、16学部と積極的に連携し、優秀かつ意欲的な生徒を日本大学へ進学させるよう取り組む。

3 「ルーブリック評価×PDCA」

スクール・ポリシーを達成するため、5つの価値観と4つのスキルに関し21のテーマを設けて達成度を5段階で可視化したルーブリック評価を入学時と各学年で年間に3回実施する。どのような生徒を育成したいのか、生徒は何ができるようになるのかということを明確にし、目的意識を持って学校生活に取り組むことができるよう進めていく。

以 上